

寢台特急トラベルダイアリー

—札幌駅四番線から三度乗車した女—

大野寿子

二〇一五年二月二日のあるニュースには感慨深いものがあつた。「豪華寢台特急『トワイライトエクスプレス』が引退する三月一二日の最終列車の切符が、一カ月前に当たる一二日〔中略〕午前一〇時の受け付け開始とほぼ同時に完売した」という。札幌―大阪間一五〇八・五キロメートルを二時間五〇分かけて走る「トワイライトエクスプレス」²。一九八九年七月より四半世紀を越え、日本海の日暮れと夜明けの幻想的な風景や、スピード化していく現代社会におけるスローライフの醍醐味を提供し続けてくれた寢台列車が引退する。車両の老朽化や青函トンネル内の電圧変更等の理由があるにせよ、二〇世紀の灯がまたひとつそりと消えていく寂しさを感じるのは、テレビアニメの『ジムボタン』³や『銀河鉄道999』⁴を見て育ち、アガサ・クリステイ『オリエント急行の殺人』⁵を読みふけた筆者だけではないだろう。時を同じくして、札幌―上野間を走る寢台特急「北斗星」や「カシオペア」も、北海道新幹線二〇一六年三月開業にむけ、引退の方向へと舵を切った。ここで少しだけ、自らの旅の思い出を振り返ることをお許し願いたい。

* * *

深緑のボディに丸いピンクのヘッドマーク（図1）。一〇両編成（電源車両込）、定員一三〇名といわれる「トワイライトエクスプレス」の一号車と二号車には、「スイート」ルーム二室を含む一〇室のみという、B寢台（二段式コンパートメント）とは趣を異にする贅沢な空間が用意されている。二〇一四年九月七日、二台の青いディーゼル機関車に牽引された「トワイライト」が、会話が聞き取れなくなるほどの轟音と共に札幌駅四番線に入線してきた（図2）。A寢台車両の窓辺に灯るアール・ヌーヴォー風の曲線的フォルムのテーブルランプが、ホームの鉄道ファン達のフラッシュを浴びるその横をすりぬけ、緑色の絨毯に迎えられて一号車に乗車した。A―五号室「ロイヤル」は三畳ほどの一人用個室（二名使用可）で、深緑色の長椅子兼ベッド、布張りの背もたれ付き一人掛け椅子に地模様入りのカーテンが、ホテルの一室のような雰囲気醸し出している。窓辺の小さなテーブルには、まるで一輪の花のようなあのテーブルランプが灯る（図3）。超人気の展望スイートではないが、気ままな一人



図3 花を象ったテーブルランプが「トワイライト」の「ロイヤル」5号室の窓辺を飾る。椅子の背もたれにはレース編みのカバーが掛けられている。

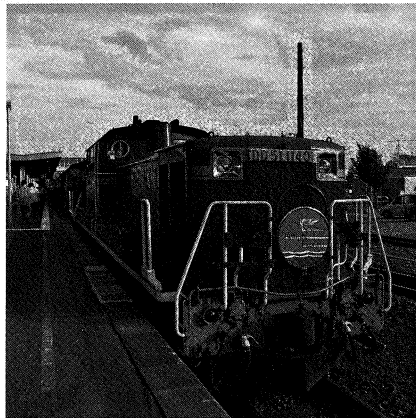


図2 道内を牽引する「鼻先の長い」青色ディーゼル機関車。

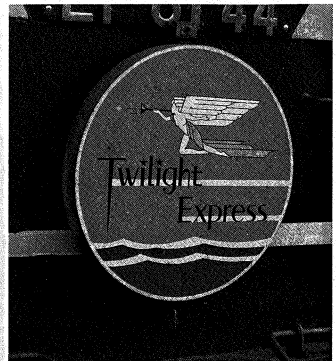


図1 髪と羽と衣をたなびかせラッパを奏でる女神の姿を象った、ショッキングピンクの「トワイライトエクスプレス」ヘッドマーク。

旅にはこの「ロイヤル」で十分である。進行方向側の壁には、スリムなクローゼットとテレビに扉が一つ。その扉を開けると、半畳ほどの空間に、シャワーと収納式洗面台と収納式トイレが機能的に備わっていた(図4)。西村京太郎ファンならこの五号室が、『豪華特急トワイライト殺人事件』(一九九二年)の最初の殺人事件の現場となることをご存じだろう。小説の舞台となった空間で過ごす旅の始まりにワクワクした。

一四時〇五分、定刻通りに札幌を発車。南千歳、苫小牧と停車し、そこから先は登別、東室蘭、伊達紋別、洞爺、長万部、八雲、森と、右側には白樺の木立、左側には内浦湾が広がる自然豊かな風景が続く。その車窓の風景を特別なものと仕立ててくれるのが、あの瀟洒なテーブルランプである(図5)。夕闇迫る中、函館の一つ手前の五稜郭駅で「トワイライト」は、JR北海道のディーゼルから青函トンネル専用のもへと機関車を付け替え、進行方向を反転させ、海底トンネルへと滑り込んだ。一九時半からダイナーを予約している三号車「DINER PLEADES」(食堂すばる)は、ステンドグラスを配した壁の向こうに、金で縁取りされた間接照明がいくつも灯り、カーテンの柔らかな曲線や頭上の金の荷物棚と共に豪華な空間を演出していた(図6、7)。そこでの食事をより特別なものにしてくれるのが、高品質のフランス料理の香りと、「大野様いらっしゃいませ」という列車クルー兼ウェイターの見えないおもてなしである。美しい風景を眺めながらのロマンティック・ダイナーを期待したが、残念ながらこの時間はちょうどトンネルの中。青い坑内灯が後ろへ通り過ぎるだけの単調で退屈な車窓だった。すると、クルーの一人が、「青函トンネル内のランプは青ですが、中間地点だけが緑色なんですよ」と教えてくれた。そして、満席で忙しい仕事の中、たった一個の緑色ランプが見える一瞬を「ハイッ」と知らせてくれた。素晴らしいサービスに感動した。とはいえ、あまりにも一瞬すぎてわからなかったとは、口が裂けてもいえない。列車は漆黒の本州へと上陸し、二二時頃、青森駅で再び陸路用の電気機関車に付け替え、進行方向を再び反転させて奥羽本線を走り出した。

実は五稜郭も青森も、機関車を付け替え乗務員が交代するだけの停車であり、客の乗降は、



図6 食堂車「ダイナー・プレヤデス」入口付近の美しいステンドグラス。右上に金の荷物棚。



図5 曲線豊かなテーブルランプが車窓の豪華な額縁となる。ウエルカムドリンクの小樽ワインと共に。ただしワイングラスはプラスチック。



図4 上方の四角く切り取られた箇所を90度手前に倒すと洗面台、下方のトンネル型に切り取られた箇所を90度手前に倒すと水洗トイレとなる。左側はシャワーのホース部分。

洞爺（北海道）を一六時三三分に発車して、翌朝四時四〇分に新津（新潟）に停車するまで不可能なのだ。また、せっかくの日本海海辺も、この上り大阪行きではその大半が真夜中の通過である。海辺の薄ら明かり時が楽しめる、下り札幌行きに人気が集中するのもそのためだ。部屋の深緑色の長椅子をセミダブルベッドにしつらえ、うとうとしていた真夜中の暗がりの中、通過していく小さな駅の名前が偶然目に入った。「羽後亀田」。どうやら秋田駅を通過して羽越本線に入ったらしい。松本清張『砂の器』（一九六一年）で殺人事件捜査中の今西刑事が、「カメラ」ということばを手がかりに行き着いた場所だ。福岡出身の筆者には、秋田は実はこの日はじめて。西村京太郎や松本清張の小説世界を行ったり来たりしながら、レトロな列車に揺られて束の間の眠りへと落ちていった。

朝食は六時四五分からの予約をした。「上り列車で朝食を楽しみながら夜明けの日本海が眺められる時間帯」という、列車クルーのアドバイスを従ったのだ。「先達はあらまほしきことなり」だ。さて、長岡に停車した五時半頃に目覚めて後、寝台列車に揺られる心地よさが瞬時に焦りへと変わった。ガタゴトと揺れる列車内で化粧をすることのなんと難しいことか。都内の地下鉄車内でも平気で化粧をしているマナー違反の女性がよくいるが、この時ばかりはその人達の匠の技を思い知った。海への眺望が一気に開け、明るい朝の海辺を楽しみ始めたあたりで直江津に停車。その直後に食堂車で朝食を開始し、七時頃、糸魚川を通過していった。朝食後、部屋に戻る通路の途中、関西弁の車掌が「スタンブ出してますよ」と話しかけてきた。二〇一四年は「トワイライト」開業二五周年記念の年で、各停車駅のスタンブラリーを開催している。ところが各駅に下車しなくても、四号車サロンカー「SALON DU NORD」（フランス語で北の談話室）に駅スタンプをすべて集めて、朝方に時間を区切って置いているのだという（図8）。これから車内アナウンスをするので、長蛇の列に並ばずスタンブを押すのなら、このタイミングがおススメという、A寝台乗客へのちょっとした親切だったのだろうか。アドバイスにはもちろん素直に従った（図9）。

部屋に戻り、富山、高岡と停車する度に、窓の外の駅ホームを行きかう通勤風景の日常と、

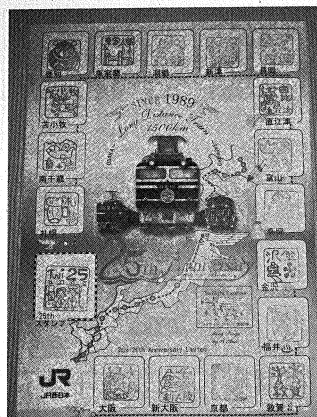


図9 「トワイライトエクスプレス」25周年記念スタンプ。乗降可能な停車駅のスタンプ集。左から札幌—南千歳—苫小牧—登別—東室蘭—洞爺—新津—長岡—直江津—富山—高岡—金沢—福井—敦賀—京都—新大阪—大阪。

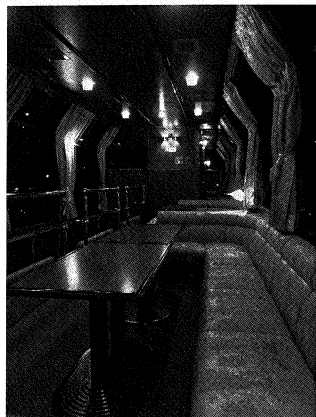


図8 サロンカー「サロン・デュ・ノール」。海側の車窓を楽しめるように段差を利用してソファが配されている。一輪の花を象ったあのテーブルランプと同じものが間接照明に。



図7 「トワイライトエクスプレス」でのディナー風景。

寝台車室内の非日常的空間とのギャップが楽しめた。外では人が足早に歩いている。内ではまったりとコーヒータイム。そもそも twilight とは、日の出前や日没後の薄ら明かりのことを指す。dark night と daylight の間を「行ったり来たり」するこの時空間が、列車名「トワイライトエクスプレス」の由来となったことは有名だ。しかしながら、この列車が乗客を行ったり来たりさせてくれるのは、どうも光と闇の間だけではなさそうだった。小説世界と現実世界、小説世界と小説世界、日常と非日常、現実と夢、平凡と豪華、^{ゴージャス}現在と過去、内と外。そんな幾重もの行ったり来たりを繰り返しながら「トワイライト」は行く、といえば、これぞ旅のロマン……とはいえ列車そのものが実は、慣性の法則に支配されて時空を移動する（ある意味）非日常のカタマリであり、停車駅で扉が開いた時にのみ日常と連結する、とでもいつてしまえば旅のロマンも半減か……などと空想しながらようやく金沢に到着した八時五十分、電光掲示板の「サンダーバード」の文字が目に入った。「トワイライトエクスプレス」の大阪着は約四時間後の一二時五三分。ところが「サンダーバード」なら二時間半で到着する。いくら豪華寝台特急でも、スピードを求める時代の流れには逆らえない。実際「トワイライト」はここ金沢から大阪に到着するまで、サンダーバードに追い越させるためだけに、小さな駅に二、三回停車することになる。その度ごとの車掌のアナウンスが心に響いた。「後から来るサンダーバードに道を譲ります。」やはりここでも老兵は消え去ろうとしているのか。さて、「トワイライト」は上りも下りも敦賀には停車するのだが、この上りだけの醍醐味は、敦賀での機関車連結作業見学だ。青森から敦賀まで、奥羽、羽越、信越、北陸と牽引していた深緑の電気機関車が、JR東日本管内の長旅を終えて切り離される（図10）。「長い間ありがとう」という、ホームに降りた乗客からの掛け声には、青森—敦賀間約一〇〇〇キロの「長い距離」と、「平成と共に今まで走ってくれて」という意味とが混じっているように思われた。ほどなくして車両基地からやってくる同型別ナンバーの機関車に付け替えられ、一時五分二分に列車は敦賀を発車し、JR西日本管内湖西線へと突入していった。敦賀を発車してすぐの名所は、鳩原のループ線である。解説希望者はサロンカーに集められ、一度通った



図11 列車の深緑のボディには、ヘッドマークと同じ、髪と羽と衣をたなびかせラッパを奏でる女神2人に縁どられた Twilight Express のマーク。

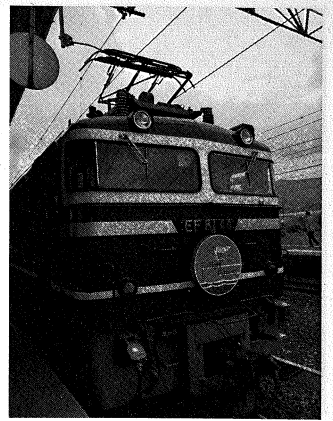


図10 本州を牽引する深緑の電気機関車。敦賀での連結作業中。

線路の上を通過する目印の説明を受けながら、ループ線を通過した。大きなカメラを首から下げた鉄道マニアや、「銀河鉄道999」のTシャツを着た男の子の会話はとてもマニアックでついでいけない感じもしたが、その人達の言葉の端々には、「トワイライト」に乗れたという幸福感が漂っていたように思う。左手に琵琶湖を眺めながら大津京を通過して、京都、新大阪。そして「いい日旅立ち」をBGMに、終点大阪へと到着した(図11)。さて、「トワイライトエクスプレス」の名は、二〇一七年開業予定のJR西日本超豪華寝台列車「Twilight Express 瑞風」に引き継がれるのだという。庶民のためのプチ豪華な寝台列車が、庶民には手の届かない超豪華なクルーズ列車へと生まれ変わり道を譲るのも、逆らえない時代の流れというわけか。

* * *

ところで、上述の西村京太郎『豪華特急トワイライト殺人事件』における五号室「ロイヤル」の内部描写はかなり具体的で、室内に「肘掛けつきの回転椅子」が置いてあると記されている。ところが実際に座った「トワイライト」同室のその椅子は、回転しない布張りの椅子だった(図3)。四半世紀の間に椅子をリニューアルしたのか、それとも寝台特急「北斗星」の「ロイヤル」ルームの内装と混同したのだろうか。こんな間違い探しも、実際に乗車してこそ味わえる、いかなれば比較文学文化の一路線だ。

さて、「トワイライト」乗車より遡ること約一年。二〇一三年九月二十九日一七時一二分、青い二台のディーゼル機関車に引かれた寝台特急「北斗星」上野行きが、札幌駅四番線から定刻通り発車した。上野まで二二四・七キロメートルを一六時間二六分かけて走る、恐らく最後のブルートレインであり(図12)、その一〇号車一室個室「ロイヤル」は、「トワイライト」の「ロイヤル」と本当によく似たシャワー・トイレ付きのA寝台だった。ベッド、テーブル、テレビ、そして一人用の肘掛け椅子(図13)。実はこちらの方が、昭和の純喫茶やバーのカウンターでよく見かけた回転式の椅子だったのだ。部屋の壁に設置された掃除機のホースのような蛇腹式ドライヤーと陽に焼けたカーテンが、昭和レトロへのタイムカプセルの

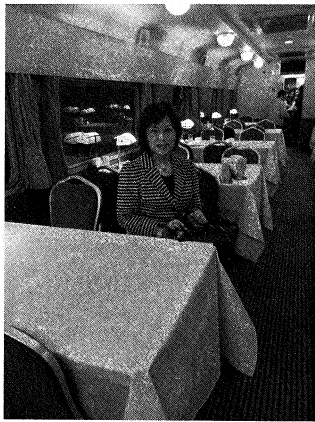


図14 「北斗星」 食堂車「グラン・シヤリオ」。

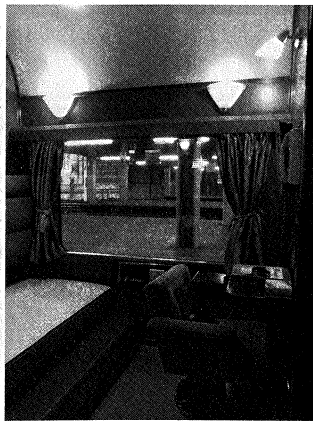


図13 「北斗星」の「ロイヤル」11号室。ベッドは引き出し式。椅子を、図3の「トワイライト」の「ロイヤル」と比較してみてほしい。



図12 「北斗星」の電気機関車。上野駅にて。

ような機能を果たしている。それもそのはず。一九八八年三月のバブルな頃、青函トンネル開通と共に誕生した昭和の「北斗星」は、平成の「トワイライト」より一つ年上、東京ドームや瀬戸大橋とは同い年である。発車直後に届けられたウエルカムドリンクのトレーには、ミネラルウォーター、お茶、ワイン、ウイスキーに氷までがてんこ盛りで、水割り片手にタバコを燻らせ書類に目を通したであろう出張途中のサラリーマンの姿が透けて見えるようだった。実は、「北斗星」の「ロイヤル」室内にはコンセントがないのだ（シェーバー用が水回り空間に一つだけ）。P.Cやスマホの充電も想定されていない時代の名残がここにある。

七号車「GRAND CHARIOT」は、フランス語で「北斗七星」という意味の食堂車である（図14）。子どもの頃よく行ったデパートのレストランのような雰囲気の中、和食「北斗星懐石御膳」を食しながら、函館までの海辺の夕暮れを楽しんだ。出発から約四時間かけて函館に到着し、そこで青函トンネル用の機関車に付け替えられる。江差線、海峡線、津軽線の順番で青函トンネルを抜けて青森に到着し、再び本州用の電気機関車に付け替えられるのは「トワイライト」と同じであるが、「北斗星」はここから青い森鉄道を通り太平洋側へと抜けていくのだ。函館の次の停車駅は仙台四時五三分。うとうとしながらもこの時思い浮かべたのが、二時間ドラマ「西村京太郎トラベルミステリー五五 寝台特急カシオペア殺人事件」のワンシーンであった。札幌発上野行きの寝台特急「カシオペア」に乗車した十津川警部夫人の直子が車内で誘拐され、いくつかの指示と共に十津川警部が途中の函館駅で下車することになる。その後、妻の無事が確認され、数十分後に同じく函館に停車した寝台特急「北斗星」に乗って、「カシオペア」を追いかけるというシーンである。

「北斗星」が実際に函館を発車した時刻は二二時四九分。その少し前の二二時一二分、同路線を同じく上野へと走行する寝台特急「カシオペア」が確かに函館から発車していた。その実地調査が実現したのが、二〇一四年三月二六日のことだった。無類の西村京太郎好きの母のために、「カシオペア」上野―札幌間往復の旅をプレゼントした筆者が、喜んでそれに同行したことは想像にかたくないだろう。前日上野を出発した「カシオペア」下りに乗って、二



図16 「カシオペア」の電気機関車。
上野駅13番線にて。



図15 「カシオペア」の通常個室「ツイン」。紫地に幾何学模様の
ベッドが手前にもう一つある。この二階個室は上部がボディにそ
って湾曲している。他方一階個室の方は、下部がボディにそって
同じく湾曲しているため少々狭く感じられる。

六日午前一〇時過ぎに札幌駅に延着した我々は、約五時間後の一六時一二分、札幌駅四番線から発車する「カシオペア」上野行きに乗車していた。ミレニアムを前にした一九九九年七月に開業した寝台特急「カシオペア」は、全車両A寝台二人用個室のハイグレード寝台列車である。一、二号車には「展望スイート」とメゾネットタイプ「スイート」等計八室が、四号車から一、二号車までは「ツイン」と呼ばれるトイレ・洗面台付き通常個室が一車両八から一〇部屋の割合で配されている。通常個室は二階と一階に分離した天井の低い縦長三畳程の空間であり、我々は往路下りで「一階個室」、復路上りで「二階個室」と双方経験することができた(図15)。「北斗星」がブルートレインのブルーボディなら、「カシオペア」は近未来的イメージともいえるシルバーに五本ストライプのスタイリッシュな外装である(図16)。一、二号車展望ラウンジは、無駄のない機能的な間接照明に、緑の椅子と紫のカーペットが「都会派」な雰囲気を与えている。「カシオペア」に二泊して「西村京太郎ごっこ」をすれば母も大満足。翌二七日九時二五分、定刻通り上野に到着した母は、そのまま新幹線で博多へと帰っていった。一方、収集癖のある筆者はといえば、ある理由で大満足には達していない。実は、シャワー・トイレ付き個室に乗車した「トワイライト」と「北斗星」では、列車マーク入りのアメニティグッズを持ち帰ることができたのだが(図17、18)、シャワー付きではなかった「カシオペア」の同種アメニティは、残念ながら入手できなかったのだ。まだ「カシオペア」が走っているうちに、再び親孝行と称し「スイート」に乗車して今度こそ、札幌駅四番線から発車する寝台列車トリオのアメニティ・コレクションをコンプリートしたいものである(図19)。

最後に……「北斗星」と同じ年に生まれ、「北斗星」と共に引退が危ぶまれた列車がある。札幌―青森間を八時間弱で結ぶ夜行寝台列車「はまなす」。青函トンネル開通と共に廃止となった青函連絡船の「夜行船」の代わりに運行を開始したこの列車も、トンネル内の電圧変更等の理由で廃止説がささやかれたが、北海道新幹線開通までもう少しだけ、ノスタルジックで「庶民派」な寝台列車の旅を提供してくれそうである。ぜひ近いうちに……。

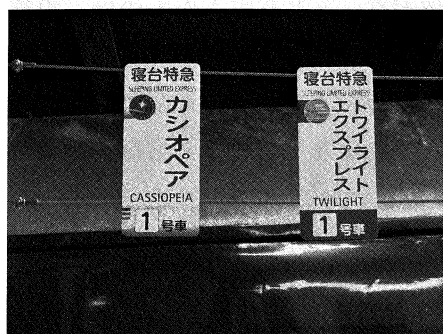


図19 札幌駅4番線の風景（頭上）。「北斗星」の乗車口板も少し離れた所にある。

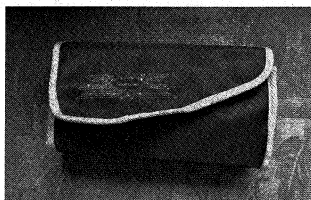


図18 「トワイライトエクスプレス」の部屋に付いていたアメニティのポーチ。ボディのマークと同じマークがプリントされている。

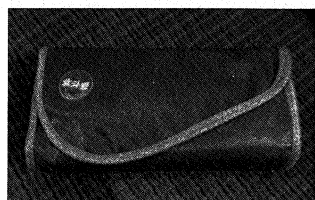


図17 「北斗星」の部屋に付いていたアメニティのポーチ。ヘッドマークと同じマークがプリントされている。



大野 寿子

おお の ひさ こ

文学部准教授

専攻 ドイツ文学

出身 福岡県

追記：2015年3月12日、多くのファンに見送られて「トワイライトエクスプレス」ラスト・ラン出発。13日、「北斗星」定期運行ラスト・ラン出発。14日、北陸新幹線金沢ー長野間延伸開業。

- 注
- 1 <http://www.tokyo-np.co.jp/article/national/news/CK2015021202000236.html> 東京新聞 Tokyo Web 110 一五年二月二日版。
 - 2 上りと下りでは路線が違う区間もあり、下り札幌行きは、一四九五・七キロメートルを二時間で走る。
 - 3 一九六〇年にドイツで出版されたミヒャエル・エンデ (Michael Ende) の児童文学『ジム・ボタンの冒険』(原題: Jim Knopf und Lukas der Lokomotivführer) を原作としたアニメーション。自我を持つ蒸気機関車「エマ」に乗り、魔神ドリンガーにさらわれた母を探して旅をする少年ジムの冒険物語。一九七四年一〇月〜一九七五年三月(金曜一九時)放映。制作：毎日放送、エイケン。
 - 4 松本零士の漫画『銀河鉄道999』を原作としたアニメーション。主人公星野鉄郎が無料で機械の体を手に入れられる星を目指し、銀河超特急999号で宇宙を旅する物語。一九七八年九月〜一九八一年三月(木曜一九時)放映。制作：フジテレビ、東映動画。映画化四回(一九七九年、一九八〇年、一九八一年、一九八八年、東映まんがまつり内の一本を含む)。
 - 5 アガサ・クリスティー (Agatha Christie) 一九三四年発表の推理小説(原題: Murder on the Orient Express)。
 - 6 西村京太郎の鉄道ミステリーを原作とするテレビ朝日「土曜ワイド劇場」(土曜二一時)でシリーズ化された二時間ドラマ。当該のシリーズ五五は、『急行もがみ殺人事件』(一九八七年)を原作とし、二〇一〇年一月二十七日に放映され、以後再放送を重ねている。十津川省三警部役に高橋秀樹、十津川直子役に浅野ゆう子、亀井定夫刑事役に愛川欽也。
- * 使用した写真はすべて筆者撮影によるものである。